



ポポフ ニュース

No. 22 2015年6月号

ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立された NGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。





(2014年6月から2015年5月まで)

2014年

- 6月10日～15日

ポポフ展「ゴリラと環境教育」 堺町画廊（京都市）

- 7月13日

日本新生児学会特別講演「ゴリラの出産・育児から人間の進化を考える」

山極寿一 シェラトン・グランデ（浦安市）

- 7月20日

京大モンキーキャンパス「言語以前のコミュニケーション：ゴリラの社会から考える」

山極寿一 日本モンキーセンター（犬山市）

- 7月21日

日本家族心理学会第31回大会特別講演「家族進化論—ゴリラの社会から見た人間性の由来」

山極寿一 京都教育大学（京都市）

- 8月11日～16日

第25回国際霊長類学会大会 ハノイ（ベトナム）

Basabose AK, Inoue E, Sebulimbwa K, Murhabale B, Akomo-Okoue E, Yamagiwa J. Estimating the population size and genetic structure of a wild chimpanzee community by genotyping fecal samples in Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo.

Yamagiwa J, Tsubokawa K, Inoue E, Ando C. Transfer of fruit among western lowland gorillas in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon.

Yamagiwa J, Iwata Y, Tsubokawa K, Ando C, Basabose AK. Association patterns among females and males of eastern and western lowland gorillas.

- 10月10日

アフリカ子どもの本プロジェクト10周年記念「バサボセさんのお話と昔話の語り」

バサボセ・カニユニ 堺町画廊（京都市）

- 11月29日

みよし市立図書館読書講演会「サル化する人間社会」

山極寿一 みよし市立ふれあい交流館（みよし市）

2015年

- 1月25日

ゴリラ来日50周年記念講演会「ゴリラの国の歴史」

山極寿一 東京大学弥生講堂（東京）

- 2月7日

第6回京都環境文化学術フォーラム講演「ゴリラと生物多様性保全」

山極寿一 京都国際会館（京都市）

- 2月6日

「アフリカの絵本でお話会とゴリラダンス」

ふしはらのじこ+森岡ミッキー 吉田児童館（京都）

- 2月19日
第4回ひと・健康・未来シンポジウム「ゴリラ：「サル化」する人間社会」
 山極寿一 日本モンキーセンター（犬山市）
- 4月22日
京都大学春秋講義「アフリカニストたちの変遷—探検から科学技術外交へ」
 山極寿一 京都大学時計台百周年記念ホール（京都市）
- 4月24日
京大三才トーク「アートな京大を目指して—垣根を越えてみまひよか？」
 茂山千三郎・土佐尚子・山極寿一 京都大学時計台百周年記念館（京都市）
- 5月29日
一般社団法人京都建築設計監理協会創立40周年記念講演「ゴリラに学ぶ社会」
 山極寿一 ホテルオークラ（京都市）



会計報告

収 入		支 出	
昨年度よりの繰越金	3,782,592	ニュースレター印刷費	25,500
講演会・シンポジウム カンパ	224,000	ニュースレター・ホームページ作成費	20,000
展覧会売上	20,000	ポポフグッズ材料費・制作費	70,877
作品売上寄付	6,800	郵送費	33,850
ポポフグッズ売上（現金）	169,400	ポポフへ送金	4,800,000
寄付（現金）	2,390,804	次年度へ繰越金	2,360,852
売上・寄付（郵便振替）	717,210		
受取利息	273		
計	7,311,079	計	7,311,079

東海ろうきん NPO 団体等寄付システム、日本グレイトエイプス保護基金、A SEEDJAPAN「ケータイゴリラ」、エネオスクリック募金から、寄付金をいただいています。



ジョン・カヘークワ

この20年、ポポフの活動するコンゴ民主共和国の東部にあるカフジ・ビエガ国立公園では、多くの不法な活動によりコンゴを代表する貴重な動物たちが数を減らしてきました。ここは西側に広がる低地熱帯雨林のコンゴ盆地と東側のサバンナとが接する境界域にあたり、南北に走る高い山々によって隔てられています。サバンナゾウとシンリンゾウ（マルミミゾウ）、サバンナバッファローとシンリンバッファロー、イボイノシシとモリオオイノシシが出会います。時には両方の種が交雑したと思われる特徴を持つ個体が見つかります。カフジのゾウはその好例で、サバンナゾウのように体が大きいのに、シンリンゾウのように牙がまっすぐです。全長3メートルを超える、まっすぐな象牙がこの地にある中央科学研究所に保管されていたこともあります。これまでの記録で3番目に長い象牙だそうですが、残念ながら少しずつ切り取られて盗まれ、政治動乱の最中に消失してしまいました。1990年代の中ごろには450頭を数えた高地のゾウも戦争中に殺されて食料にされ、ほとんど姿を消してしまいました。1996年に260頭いたゴリラも半減しました。21世紀に入ってから政治的に不安な情勢が続き、密猟、不法な伐採、地下資源の採掘などが絶えず、多くの動物たちが生息地を荒らされ、食料として消費されて数を減らしました。そういった不法な活動を何とか減らせないものかと案じて、1990年代に300人近い人々を対象にポポフが実施したインタビュー調査では、「腹が満たされない限り、食料獲得や現金収入になる活動を止めるわけにはいかない」という答えが大半

でした。以来、ポポフはこの問題の解消を目指して、食料になる家畜を配って増やし、養魚池を運営し、植樹活動を実施して、何とか自前で腹を満たし、日々の必需品を揃える活動を実施してきました。

しかし、地元の住民に必要なのはやはり将来の生活を見通すための知識です。法律を理解し、他の国や地域で行われている事例を知り、自分たちの文化を建て直し、誇りをもって将来の暮らしを計画するためには、本を読んでさまざまな知識を蓄えねばなりません。中年以上の世代にはまだ字を読んだり書けない人々がたくさんいます。とくに、1970年の国立公園設立以前に、保護区の森で暮らしていた狩猟採集民のトゥワ人は、学校で学ぶ機会がありませんでした。そこで、ポポフはさまざまな世代を対象に環境教育をする学校を作りました。最初に作ったのが、子持ちの母親たちと就学前の児童向けの学校でした。文字を十分に読めない母親たちに言語教育をして、子どもたちに自然と交わる知識を教えました。その後、小学校や中学校（中学と高校をあわせた6年間）にも環境教育学級を増やし、校舎を新設してきました。今では千人近い生徒を抱える大所帯となりました。今年も最上級生で国家試験を受けた全員が合格し、大学へ入学する資格を得ました。公立や有名私立ではなく、地元の人々がお金を出し合って経営する学校で、生徒がこんないい成績を修めるのは初めてで、全国的に大きな評判を呼んでいます。

ただ、ポポフの学校に足りないものがひとつあります。それは図書館です。植民地時代、この地には中央科学研究所と農業研究所という2つの大きな研究所があり、図書館にはたくさんの貴重な書物があふれていました。子どもたちはそこへ通う知り合いを通じて書物になじみ、古今東西の知識を学ぶことができました。でも独立後の経済状態の悪化と戦争によってこれらの研究所は廃墟のようになり、多くの蔵書が盗まれて消失しました。ここ20年以上、新しい本や雑誌は入って来ていません。子どもたちは、時折援助によって持ち込まれる欧米の本や、布教によって配布されるキリスト教の本しか実際に接する機会はないのです。学校には教科書もなく、先生が自分の知識や経験を生徒たちに伝えるしかありません。これでは、生徒たちが現代に役立つ知識を習得することができません。

そこで、ポポフは学校に図書館を建設し、世界に呼びかけて生徒たちに必要な本を揃えようと考えました。まず図書館の敷地をアンガ中学校の土地の中に確保し、設計図を



POPOF が制作したバナーについてイテベロで教えるジョン・カヘークワ

作りました。予算との関係でポポフ日本支部と相談しながら、何度もその設計図を作り変え、やっと去年の12月に見取り図が完成しました。ポポフ日本支部からは多額の援助をいただき、とても感謝しています。図書館はなるべく手作りのものにしようと、レンガを作るところからはじめました。地元の人々に協力してもらって土台を造り、今やっとレンガの壁を立ち上げたところです。こうして地元の人々の手によって図書館が完成すれば、みなそれを貴重に思い、おとなや子どもがいっしょに利用できる図書館になるはず。完成後は、子どもたちに読み聞かせる絵本も世界中から集め、親子が集う場所にもしていくつもりです。将来は、ここで地元の話盛り込んだ絵本や教科書も作りたと思っています。今年中には完成する予定ですので、どうかご期待ください。



図書館の建設



バサボセさんと国際霊長類学会で発表しました

山極寿一

霊長類学の成果を発表する国際学会の大会が、2年に1度開かれます。その第25回目の大会が去年の8月にベトナムのハノイで開催されたので、バサボセ・カニューニさんと参加しました。

バサボセさんは、長年にわたって調べてきたカフジ・ビエガ国立公園のチンパンジーの集合パターンや個体の移動について研究結果を発表しました。京都大学理学研究科でいっしょに研究している井上英治さんたちとの共同研究です。まだチンパンジーが十分に観察できるほどには馴れていないので、バサボセさんは毎晩作られるチンパンジーのベッドに残された毛を集め、そこからDNAを抽出しました。ミトコンドリア（母を通じて伝わる）やY染色体（父を通じて伝わる）のDNAを分析して、まずチンパンジーの群れが母系的なのか父系的なのかを調べました。つまり、メスが移動せずに母子や姉妹といった母系的なつながりが強いのか、オスが移動せずに父子や兄弟といった父系的なつながりが強いのかを分析したのです。その結果、他の地域をチンパンジーと同じように父系的なつながりが強いことがわかりました。また、これまで直接観察からは20数頭だと考えられていた群れが、少なくとも37頭以上いることが判明しました。DNAの分析は直接観察では難しいこ

とにまで理解を広げてくれる有効な手法です。これからもこの方法を併用して研究を深めていこうと考えています。

私は、坪川桂子さん、安藤智恵子さん、井上英治さんたちと最近ガボン共和国のムカラバ国立公園で発見したゴリラの食物分配行動について発表しました。同じ類人猿のチンパンジーやオランウータンでは食物を分配する行動はよく知られています。ゴリラでも母親が自分の食べている食物を育児中の子どもに取らせてやる行動は報告されています。これはコンゴの大湿地の中で、ミネラルに富んだ水草を引き抜き、泥を洗って食べる際に観察されたものです。でもまだ、おとなどうして食物が分配されるのは誰も見ていませんでした。私たちは昨年、やっと人間に馴れ始めたニシローランドゴリラの群れで、ゴリラたちがトレキュリア・アフリカーナというフットボール大のフルーツを分配しているところを目撃したのです。2010年に私が観察した事例を合わせると合計18例になり、しかもおとなどうしの分配も含まれていました。シルバーバックがフルーツのかけらをメスに取るのを許し、翌日にそのメスと交尾した事例もありました。チンパンジーのオスも発情メスに食物を分配する傾向が見られるので、ゴリラも共通した特徴があることがわかります。これまで食物分配がおとなのゴリラに見られなかったのは、低地でニシローランドゴリラがなかなか人間に馴れないので、野外調査がフルーツの少

ない山地にすむマウンテンゴリラに集中していたことによります。これからムカラバの私たちの調査地を中心にこういった新しい事例がたくさん発見され、ゴリラのイメージが変わるかもしれません。

もうひとつ、私はゴリラの集合パターンを山地のカフジと低地のムカラバで比較して見ました。ゴリラが観察できなくても、毎晩ゴリラが作るベッドの位置から彼らの集合パターンを分析することができます。ベッドに残された糞の大きさから体の大きさを測ります。シルバーバックのベッドには長い白い毛が残されているし、おとなの糞と赤ん坊の小さな糞があれば、そのベッドには母子が寝たことがわかります。2地域を比べてみると、カフジではいつも



ムカラバゴリラの食物分配

みんながシルバーバックの周りに集合し、とくに母親と乳飲み子がシルバーバックの近くで寝ています。ところが、ムカラバではシルバーバックは独りか子どもたちと寝ていて、メスたちはシルバーバックから少し距離を置いてベッドを作る傾向があります。日中に群れが休むときに観察した結果を比べてみても、カフジのほうが固まって休む傾向が強いのです。これは、ムカラバではカフジよりメスたちがシルバーバックから自立して暮らしていることを示唆しています。最近の調査から、低地のゴリラのほうが高地のゴリラより成長が遅く、離乳や親離れ、成熟する時期も遅い傾向があることが指摘されています。フルーツが豊富にある低地では樹上性が強く、地上性の草ばかり食べている高地に比べ、ゴリラたちが散らばって暮らす傾向があります。それがメスの自立性を高め、子どもをシルバーバックに渡して離乳させる時期を遅らせているのかもしれない。また、樹上では体重の軽いほうが有利になるため、成長が遅れるのかもしれない。これからの調査によって確かめていかねばならないことのひとつです。

ハノイの大会では、初めて4亜種のゴリラ（マウンテン、ヒガシローランド、ニシローランド、クロスリバー）の生態や行動を比較するシンポジウムを開くことができ、多くの新しい情報を交換することができました。とくに、声や行動が地域間で大きく違っていることがわかり、とても興味深く思っています。近く、ドイツのマックス・プランク研究所のマルサ・ロビンズさんを中心に野生のゴリラの行動目録と地域差がまとめられる予定になっていますので、ポポフニュースでもご紹介していこうと思っています。



ゴリラ日本来日50周年記念シンポジウム

今年の1月24日と25日に、東京でゴリラ来日60周年記念講演会が開かれました。日本に最初にゴリラがやってきたのは1954年で、しばらく移動動物園で飼われていましたが、1957年の11月に上野動物園で展示飼育されることになりました。その3頭のゴリラはオス2頭、メス1頭で、いずれも来日時2歳前後の子どもでした。カメルーンから来たニシローランドゴリラです。

以後、日本に動物園が新しく作られるとともにゴリラの輸入が増加し、さまざまな動物園でゴリラが見られるようになりました。そのほとんどはニシローランドゴリラで、

子どもの頃に野生で捕獲され、そのまま動物業者を通じて日本にやってくるか、欧米の動物園でしばらく飼育されてから日本にやってきたゴリラたちです。最初に来日した3頭のうち最も長寿で45歳まで生きたブルブルは、死後に解剖すると足にたくさんの散弾が残っていたことが判明しました。おそらく現地で捕らえられた際に銃で撃たれ、そのときに弾が体内に入ったままになっていたと考えられます。ブルブルはずっと足を引きずっていたのですが、その原因が幼い頃に捕らえられた際に受けたことだとわかったとき、関係者は大きな衝撃を受けました。1973年に絶滅



阿部知暁 画

の恐れのある野生動植物の国際取引を規制するワシントン条約が発効し、日本も1980年に加盟したので、野生のゴリラを直接日本へ輸入することはなくなりました。しかし、未だに現地では動物園に高く売れるという理由でゴリラを捕まえる人々が後を断ちません。

ヒガシゴリラとして日本にやってきたのは、1961年に財団法人日本モンキーセンターにやってきたオスとメスのペア2頭だけです。当時はマウンテンゴリラに分類されていましたが、コンゴ民主共和国の低地で捕らえられているので、ヒガシローランドゴリラだと考えられます。2頭ともおとなになっていましたが、空輸中に結核にかかり、到着後2週間以内で死亡しました。空輸の経路が長すぎて、空輸中の環境が劣悪だったことに起因する発病だったそうです。ヒガシゴリラは世界中の動物園にもほとんどいません。皮肉なことに、つい最近まで野生の暮らしがよくわかっていたのは山地にすむマウンテンゴリラで、動物園で飼育されている低地のニシローランドゴリラの暮らしはほとんど知られていませんでした。このため、動物園ではマウンテンゴリラをお手本にして環境づくりをしてきました。その結果、ニシローランドゴリラも地上性だと見なして、樹上の環境をあまり作らず、草食と見なしてフルーツや昆虫をあまり与えませんでした。

今回の記念講演会では、こうした日本の動物園の60

年にわたるゴリラ飼育の歴史を語るとともに、最近明らかになった低地の野生ニシローランドゴリラの暮らしぶりや、保護の試み、エコツーリズムや環境教育の実践について事例を出して話し合いをしました。日本の動物園ではなかなかゴリラの子どもが生まれず、単独で飼育されたり、オスとメスの2頭で子どもができないままに同居し続けたりしてきました。1990年代に全国の動物園からゴリラを上野動物園に集めて「ゴリラの森」を作り、やっと日本でも園間が協力してゴリラの繁殖ができるようになりました。2000年には上野動物園に待望のモモタロウが誕生し、それから京都市動物園や名古屋市の東山動物園でも赤ちゃんが誕生し、現在ベビーブームを迎えています。京都市動物園では母親ゲンキと父親モモタロウがどちらも日本の動物園生まれです。しかも、母親の乳が出なかったり、経験不

足から赤ちゃんを育てられなくても、まず人工保育をして赤ちゃんを育て、それから母親に戻すという試みが京都でも東山でも成功しています。上野では母親と父親以外に血縁関係のないゴリラがいる群れの中で出産し、母親が子どもを育てることに日本で初めて成功しました。今では、群れの中でゴリラの子どもが元気に育つ様子が、京都、東山、上野で見られます。

しかし、動物園のゴリラの環境は大幅に改善されましたが、野生のゴリラの置かれている状況は相変わらず深刻です。ニシローランドゴリラの生息地の多くでは未だにゴリラが食料として狩猟されており、エボラなどの感染症にかかって地域的な絶滅が起こっています。こういった事態を防ぐためには現地で自然環境を保全する意識を高め、人とゴリラの接触を減らす必要があります。エコツーリズムは前者の目的に沿って導入された方法ですが、後者の危険を増す恐れがあり、両者のバランスを図るための方策が不可欠です。その実践事例がガボンとコンゴから報告され、ポポフもこれまでカフジで20年間以上も行ってきた経験を紹介しました。こうした野生のゴリラの現状や保護の実践が日本の動物園であまり紹介されていないという指摘もありました。ポポフはこれからますます動物園との連携を強め、カフジのゴリラの現状を伝えていこうと思っています。



新しい日本モンキーセンターが発足しました

昨年の4月に、公益財団法人日本モンキーセンターが新たに発足しました。日本モンキーセンターは1956年に設立され、文部科学省に博物館として登録された財団法人としてこれまで60年近く歩んできました。その間に世界サル類動物園を立ち上げ、名古屋鉄道株式会社の支援を受けながら霊長類学の普及や自然保護教育に励んできました。しかし、最近では動物園の経営が中心になり、隣接する遊園地との経営が一体化する中で、どうしても初期の目的が薄れがちでした。そこで、遊園地を切り離し、京都大学を中心とする教育研究機関との連携を強め、より学術色を出した公益財団法人として生まれ変わることにしたのです。

理事長には元京都大学総長の尾池和夫さん（現京都造形大学学長）、所長には京都大学霊長類研究所教授の松沢哲郎さん、博物館長には京都大学総長の山極寿一さん、動物園長には京都大学野生動物研究センター教授の伊谷原一さんが就任しました。霊長類の研究、調査、資試料収集、展示、学術誌発行、動物園経営、環境教育、社会貢献を行っていきます。

発足時には、特別展示としてこれまで日本の研究者が行ってきた野生類人猿の研究と保護活動を紹介しました。アジアのクタイやダナンバレーにすむオランウータン、アフリカのボソウ、マハレ、カリンズにすむチンパンジー、ワンバにすむボノボ、カフジやムカラバにすむゴリラとチンパンジーたちです。カフジの紹介にはポポフの活動を大きく取り上げ、ポポフグッズやニュースレターを置いてもらっています。

新しい出発に伴い、「モンキーセンター友の会」が発足しました。モンキーセンターのモットーである「サルを知ることはヒトを知ること」に基づき、モンキーセンターでは年間を通じていろんな催しをやります。京都大学モンキーカレッジや京大日曜サロンで霊長類学や野生動物学を学んだり、キュレーターズガイドで動物園に楽しみ方を学びます。友の会の会員（大人3000円、小中学



モンキーセンター友の会 NEWS LETTER 表紙

生2000円)になれば駐車場代は無料になり、年間パスポートが入手できます。あらかじめ年間スケジュールをニュースレターでお知らせしますので、自分の好みに応じて参加することができます。10月と3月には友の会の集いが開かれ、同じ興味を持つ仲間たちと交流ができます。

ぜひ、下記のホームページを参照して友の会に入会し、モンキーセンターや仲間たちと積極的な交流を図ってください。

<http://www.j-monkey.jp/information/friends/index.html>





カフジにおけるゴリラの近況

カニューニ・バサボセ

カフジ・ビエガ国立公園で管理しているゴリラたちに目立った変化はありません。観光客が毎日のように訪れているチマヌーカ集団では、マカリと名づけられたメスが消失し、3歳になったばかりの子どもが残されました。この子は毎日シルバーバックのチマヌーカについて歩き、夜もチマヌーカのベッドにもぐりこんで寝ています。母親なしで赤ん坊が育った例はこれまでにありますが、いずれも顕著に成長が遅れます。この子も何とか生き残ってほしいものです。

ムシャムカ集団を継いだ息子のムガルカがメスをチマヌーカに奪われてヒトリゴリラになり、ミシェベレ集団やムファンザーラ集団のシルバーバックが亡くなったため、観光客が見に行けるゴリラ集団はチマヌーカ集団だけになりました。ミシェベレ集団のメスたちは散り散りになって他の集団へと移籍し、ムファンザーラ集団は若いオスが後継いだものの、他の集団との接触を避けて遠くへ行ってしまったからです。

そこで、新しい集団を人に馴らし、観光客の受け入れを図ろうと、1年前から努力を続けてきました。ゴリラを人付けした経験のあるジョン・カヘークワが中心となって、ムプングウェ集団と名づけた新しい集団と毎日のように接触を続けたのです。おかげで最近やっとシルバーバックのムプングウェに近づけるようになりました。メスにはまだ人間を恐れている個体がありますが、ここまでくればもう大

丈夫です。近いうちに観光客を連れてムプングウェ集団に会いにいけるようになるでしょう。

調査研究のために毎日動きをモニターしているガニヤムルメ集団もあまり大きな変化はありません。ただ、南にいる隣接集団の影響を受けて、だんだん西の方へ行動域を移しているのが気になります。これまでの行動域の西側は標高が高く竹林が優先していてフルーツが少なく、竹の子の季節以外にはゴリラは利用しません。隣接集団と敵対関係を強めたり、食物が極端に不足したりするとゴリラは行動域を大きく変えてしまうことがあるので、ガニヤムルメ集団もその可能性があります。ガニヤムルメ集団が追跡不可能な地域に移動してしまわないように祈っています



ムプングウェの集団で人付け中のジョン・カヘークワ

カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		16		7	8	32
ビリンドゥワ	1		3		3	1	8
ムファンザーラ		1	8	3	3	3	18
ランガ	1		5		1		7
ムプングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		2	2	13
マンコト	1		12	1	1	2	17
無名	1	1	10			3	15
合計	8	2	68	4	17	19	118

催しのご案内

2015年

- 9月19日 マハレのチンパンジー研究 50 周年記念シンポジウム、東京大学弥生講堂（東京）
- 10月11日 日本モンキーセンター友の会総会、日本モンキーセンター（犬山市）
- 11月14日、15日 サガシンポジウム（SAGA: Support for Asian and African Great apes）京都市動物園（京都市）

近刊案内



- 日本アフリカ学会編 『アフリカ学事典』 昭和堂
- ふしはらのじこ文・絵 『ふたごのゴリラ』 福音館書店
- 山極寿一著 『「サル化」する人間社会』 集英社
- 山極寿一著 『父という余分なもの—サルに探る文明の起源』 新潮文庫
- 安藤忠雄他著 『人生を考えるのに遅すぎるといえることはない』 講談社
- 小崎哲哉編著 『続・百年の愚考』 紀伊国屋書店
- 關野伸之著 『だれのための海洋保護区か—西アフリカの水産資源保護の現場から』 神泉社
- 大門 碧著 『ショー・パフォーマンスが立ち上がる—現代アフリカの若者たちがむすぶ社会関係』 春風社
- 伊藤千尋著 『都市と農村を架ける—ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』 新泉社
- 戸田美佳子著 『越境する障害者—アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』 明石書店
- 荒木光弥著 『アフリカに大学をつくったサムライたち—ジョモ・ケニヤッタ農工大物語』 国際開発ジャーナル社
- 大山修一著 『西アフリカ・サヘルの砂漠化に挑む—ごみ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』 昭和堂
- 京都芸術センター叢書 『継ぐこと・伝えること』 京都芸術センター
- 伊沢紘生著 『新世界ザルーアマゾンの熱帯雨林に野生の生きざまを追う』 上下 東京大学出版会
- 末原達郎他著 『農業問題の基層とはなにか—いのちと文化としての農業』 ミネルヴァ書房
- 長井三郎著 『屋久島発、晴耕雨読』 野草社
- 山下晋司編 『公共人類学』 東京大学出版会
- 南 直人編 『宗教と食』 ドメス出版
- 多田 満編 『センス・オブ・ワンダーへのまなざし』 東京大学出版会
- 松野 弘編 『現代環境思想論』 ミネルヴァ書房
- 小川 了著 『ジャーニューとヴァンヴォー—第一次大戦時、西アフリカ植民地兵起用をめぐる二人のフランス人』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 新井紀子著 『ロボットは東大に入れるか』 イースト・プレス
- 都留泰作著 『＜面白さ＞の研究—世界観エンタメはなぜブームを生むのか』 角川新書
- クリストファー・ボーム著、斉藤隆央訳 『モラルの起源—道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』 白揚社
- フランス・ドゥ・ヴァール著、柴田裕之訳 『道徳性の起源—ボノボが教えてくれること』 紀伊国屋書店
- 坂本龍太著 『ブータンの小さな診療所』 ナカニシヤ出版

ポポフ・グッズ通信販売

ポポフ日本支部では、ポポフのメンバーが作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で「青色」の振り込み用紙に

口座番号：00810-1-90217、
加入者名：ポレポレ基金、

と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

☆ポポフ絵はがきセット（おまかせ10枚組）
1000円

☆ピチブ・ムフンブーカ絵はがきセット
600円（おまかせ5枚組）

☆ケイタイ・ストラップ（白と黒）
2000円

☆ポポフエコバッグ
【ア】～【カ】の図柄をご指定ください
1500円

★ポポフエコバック（厚手のしっかりした造り）
2500円 注文時に「厚手」とお書きください

★ポポフ2016年カレンダー
（予約販売11月頃配布）
1000円



ポポフ絵はがきセット
（おまかせ10枚組）



ピチブ・ムフンブーカ絵はがき
セット（おまかせ5枚組）



ケイタイ
ストラップ（白）



ケイタイ
ストラップ（黒）

エコバッグ



ポポフカレンダー（2015年のサンプル）



この他にも図柄が選べるバラ売りの絵はがきや、ポポフを応援するアーティストによるイラストのエコバッグがたくさんあります。また、ここに掲載できなかったグッズも用意しています。12ページでお知らせしている「ポポフのホームページ」にあるグッズのページも是非ご覧ください。

http://popof-japan.com/blog/?page_id=24



語り手、挿し絵：ピチブ・ムフンブーカ
訳：ふしはら のじこ

カチェチェとゾウ

ある日、カチェチェ（鳥の名前）が森の中を歩いていると、水場で水を飲んでいるゾウと出会いました。カチェチェは「あなたは私よりも、森のどの動物たちよりも大きくて偉いけれど、私カチェチェは何も食べないで飲まないで、6日間でも平気で過ごせるのですよ」とゾウに言いました。ゾウは「おまえなんか私の前では取るに足りないやつさ。2日もたたないで死んでしまうだろうが、私は平気で森の中を歩き続けることだろうよ」と言いました。

「ではゾウさん。あなたは歩いて私はあなたの背中に乗って、さあ旅をはじめようじゃありませんか」とカチェチェはゾウに言いました。

2人の旅がはじまりました。カチェチェは「今から草を食べたり水を飲んだりしちゃだめですよ。私も虫を食べたり水を飲んだりしませんから」とゾウに言いました。ゾウはカチェチェに「お前さんは、そうやって飢え死にするまで私の背中に乗っていただいいさ」と言いました。カチェチェは「さあ、準備はできましたよ。旅をはじめましょう」と言いました。

2人の旅が始まりました。ゾウは山を登り始めました。カチェチェは自分が飛び上がっても、ゾウは後ろを見ることができないのを知っていました。カチェチェは飛び上がると、ゾウが落とした糞の臭いに集まって来た虫を食べました。

カチェチェは、ゾウがまったく気づかないのを分かって言いました。「今日で、旅も3日めですね」とゾウは「私は少しも腹はへっていないぞ。さあ旅を続けよう」といいました。

朝早く、ゾウとカチェチェは道を歩いて行きました。カチェチェがゾウに聞きました。



「あなたのお腹から血が出ているのではないですかい？」

ゾウは「お前さんは知らないのかい。4日も飲まず食わずしていると、赤いおしっこが出るもんだよ。お前は旅を続けるのが怖くなったんだろう？」

とカチェチェに言いました。カチェチェは「いいえ、私はあなたの背中にちゃんといますよ」と言いました。ゾウは「私のからだのことなど心配するな」と言って、2人はまた旅を続けました。

5日目になると、ゾウのからだは大そう変わってきました。ゾウは「カチェチェ、お前はなかなか知恵の働くやつだ。飛び上がって好物の虫を食っているんだろう」と言いました。カチェチェは答えて「背中の上で虫を食べたりする訳がないでしょう。ほら、空腹でこんなに痩せてしまいましたよ」と言いました。

「では旅を続けよう。もし空へ飛び上がって虫を探したりしたら、お前さんを地面にたたきつけて食ってしまうからな」とゾウは言いました。

5日目の夜。ゾウは何日もの間、何も飲まず食べなかったせいで、眠ることも出来ませんでした。ゾウは言いました。「私はもう死んでしまうだろう。何か食べさせて水も飲ませてくれないか」

でもカチェチェは「私たちの約束の日まで、あと1日ですよ」と言いました。次の朝になると、ゾウはこの世に別れを告げてしまいました。カチェチェは喜びの声を上げました。

ゾウは自分を偉いと思い込み、カチェチェをばかにしたために死んでしまいました。

ポポフのホームページ

日本語サイト：<http://popof-japan.com/blog/>



ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシームワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部

ポポフの英語版ウェブサイト

英語サイト：<http://www.polepolefoundation.org/>



ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、ポポフ・インターナショナル POPOF-I による英語版のウェブサイトがあります。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信しています。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事が記事になっています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです。

英語ブログ：<http://www.blog.polepolefoundation.org/>



お願い：上記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

